

---

逸見一信筆「五百羅漢図」と増上寺学僧の戒律思想

—袈裟と十八物の観点から—

---

芝・増上寺所蔵の五百羅漢図(以下、増上寺本)は、幕末の絵師・逸見(狩野)一信(1816~63)が嘉永7年(1854)から約10年をかけて描いた100幅からなる大作である。1983年、河合正朝氏によって初めて紹介され、近年、その全貌が公開された。極彩色による細密描写、西洋画法を摂取した巧妙な構成にみられる新奇な造形は、絵師の力量と独創性を十分に示すもので、伝統的な五百羅漢図の図像に縛られない新しい構想とともに、高い評価に値する。しかし、源興院主・丁瑩を含めた増上寺側の意向や、その意向が五百羅漢図の内容に如何に反映されているかについて、これまで十分な議論は行われていない。制作にあたり一信は、学僧の大雲(1817~76)、養鷗徹定(1815~91)、日野靈瑞(1818~96)の三人から「梵土の古儀」を描くこと、すなわち戒律に随った内容を反映させるよう指導を受けたという。本発表では「梵土の古儀」の具体的内容について、特に袈裟と器物に着目し、学僧の要請が如何に絵画に反映されているのかを検証する。

大雲「新図五百大阿羅漢記」(文久3/1863)によれば、大雲は自ら三衣・祇支等を用いて、色や着用法について一信に教授したという。大雲は、戒脈上、江戸時代の戒律復興を推進した慈雲飲光(1718~1805)の曾孫弟子にあたり、増上寺本の制作方針を定めるにふさわしい人物であった。大雲は、後に『啓蒙随録』を著し、戒律遵守を説くとともに、慈雲『方服図儀』(宝暦2/1752)及び、慈雲に学んだ顕道敬光(1740~95)『大乘比丘十八物図』(文政3/1817)の二書を読むよう仏教の初学者に勧めている。これらの書物は、戒律について挿図を用いて明示したもので、学僧の指導や、制作を前にした一信自身の学習を知る重要な手がかりとなる。

二書と増上寺本とを参照すると、まず、袈裟については、『方服図儀』との対応だけでなく、戒律復興の流れを受けて京都出身の仏絵師・中西誠應(生没年未詳)が撰述した挿図入りの『畫像須知』(嘉永元/1848頃)も、参照されていたらしい。特に第17幅(剃度)において裙を着用する沙弥の姿は、『畫像須知』の挿図と一致する。中西誠應は、羅漢図研究で著名な徹定の『羅漢図譜集』(文久2/1862)において挿図を担当した絵師で、『畫像須知』は、一信の手控えとして最もふさわしい書物であった。水瓶・錫杖・座具といった戒律に規定される器物は、『大乘比丘十八物図』の挿図と対応する物が、16種確認できる。

日本仏教絵画史において幕末という時代が考察の対象とされたことは少ないが、増上寺本は、戒律思想を反映した新図の構想において、絵師と学僧との共同が実現されたきわめて正統な仏画であった。そのことは、新奇な視覚世界の魅力を放つ、一信の絵師としての独創的な領分を否定するものではない。